

みどりのこえ



発行 長野県環境保全研究所

令和7年(2025年)3月10日

編集 長野県環境保全研究所 自然環境部(飯綱庁舎)
〒381-0075 長野市北郷 2054-120
TEL.026-239-1031 FAX.026-239-2929
E-mail:kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp



2024年の世界最南限確認母子群 (阪本森人撮影:2024年7月13日仁田岳)



ライチョウ世界最南限個体群を見守る

静岡ライチョウ研究会は、1997年よりライチョウ (*Lagopus muta*) の世界最南限分布地で調査を続けている。世界最南端の繁殖地は長野県、静岡県境にある南アルプス南部イザルガ岳(標高2,540m)である(田嶋1985)。そこから北へライチョウの生息する県境の稜線は垂高山帯針葉樹林を挟みながらハイマツ群落が島状に分布する仁田岳(標高2,524m)、茶臼岳(標高2,604m)、上河内岳(標高2,806m)と続く。

各山岳のなわばり数は定期的調査を続けているイザルガ岳で1から2なわばり、仁田岳で1なわばり、茶臼岳で2から4なわばりとなっている。また不定期調査の上河内岳では3から9なわばりである。これら山岳のうちイザルガ岳と仁田岳はなわばりができる年とできない年があるが、茶臼岳以北では調査を実施した年には必ずなわばりを確認できる。

最南限のイザルガ岳では、2016年から2018年に1なわばりが確認され、2017年と2018年のなわばり雄が標識調査で同一個体と分かっている。しかしな

がらこの2018年を最後になわばりがもう6年確認できていない。

イザルガ岳のなわばり消失はどのようにしてなのだろう。そして今年も続くのだろうか。その原因が地球温暖化というのはやさしいが、生息環境となるハイマツ群落や風衝草原には景観的に大きな変化はみられない。だとすると、近隣山岳からの分散雄の移入減少や南アルプス北部からの数十キロに及ぶ雌の長距離分散減少が原因か。はたまた捕食者による影響や孵化して2~3か月の雛の生残率の悪化なのか。疑問は尽きずなかなか調査がやめられない。

田嶋一善(1985)世界南端のなわばり(ライチョウ). 続々野鳥の生活. pp.103-107、築地書館

文・写真 朝倉 俊治 あさくら としはる
静岡ライチョウ研究会会長
南アルプスコネスコエコパーク科学委員会委員
日本野鳥の会静岡支部副支部長

Contents

【巻頭言】ライチョウ世界最南限個体群を見守る (朝倉俊治/静岡ライチョウ研究会会長) …	1
【特集】北アルプスのライチョウをとりまく“今”を知る ……	2 ~ 8
【こんなことやってるよ】木曾馬文化と草原の再生チーム ……	9

【Report】山と自然のサイエンスカフェ@信州 ……	10
【お知らせ】令和7年度のイベント予定 ……	10
生物多様性ポータルサイト「信州いきものがたり」 ……	11
【適応センター通信】 ……	12



北アルプスのライチョウをとりまく “今”を知る

令和6年度信州自然講座開催報告

研究所の信州自然講座（市立大町山岳博物館・長野県環境保全研究所連携協定更新記念、大町市制施行70周年記念事業）「北アルプスのライチョウをとりまく“今”を知る」を、令和7年（2025年）2月8日（土曜日）午後に、開催しました（共催：大町市、大町市教育委員会）。当日は大雪の中、84名の方が参加し、講演や展示をご覧くださいました。詳細は、所ホームページ（右の二次元コード）をご覧ください。本特集では、講演内容を紹介します。（浦山 佳恵・高野 宏平／自然環境部）



当日の展示を見る参加者

中部山岳地域の近年の気候変動

◆日本の気温の経年変化

日本の気温の変化を調べるために、気象庁は全国15か所の気温観測データを長年集めています。これらの地点は、都市化の影響を受けにくく、日本全体を表すように選ばれています。気温の変化を見る際には、15地点の平均気温を比べるのではなく、その年が「ふつうの年」と比べてどれくらい暑かったか、寒かったかを詳しく調べています。

日本の平均気温は、1898年から2023年の間に、100年あたり約1.35℃の割合で上昇しています。これは、世界平均（0.78℃／100年）よりも速いペースです。日本の気温は、常に一定のスピードで上がっていたわけではなく、大きく分けて3つの時期に分けることができます。近年の35年間は、特に気温上昇が加速しており、100年あたり約2.56℃も上昇しています。このように、長期的な温暖化傾向の議論と数十年単位の気温変化の議論とは区別する必要があります。

また、季節によって変化の仕方が異なります。夏と秋は、継続的に気温が上昇する傾向が見られます。冬と春は、1945年頃までは比較的寒い時期が続き、その後は安定した状態が続きました。1989年からの冬季平均気温はジャンプして上がり、その後は変化傾向が安定しています。

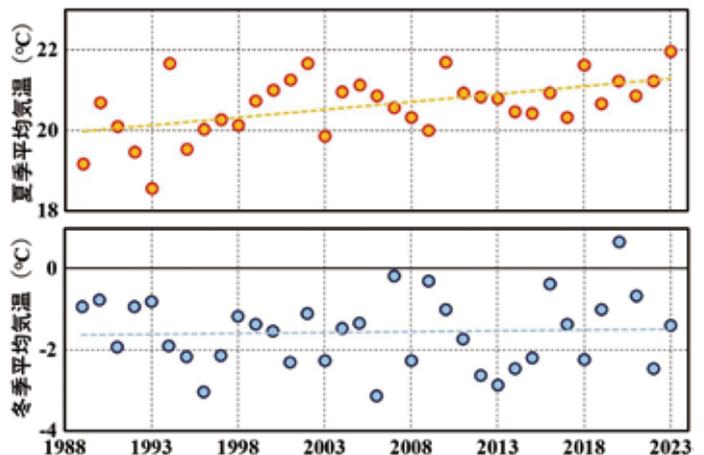
◆中部山岳地域の気温の経年変化

中部山岳地域（東経137度から139度の範囲、ア

メダス観測地点については標高700メートル以上の地点のみ）の1989年から2023年までの気温変化を詳しく調べました。その結果、春、夏、秋には、多くの観測地点で気温が上昇する傾向が見られます。一方、冬はすべての地点で統計的に有意な変化がみられず、むしろ気温が減少傾向にある地点も複数あります。

標高が低い地点の冬の気温は0℃前後なので、気温が上昇すると雪は降ってくる途中で融けて雨になります。しかし、標高が高い地点の気温はわずかの気温上昇ではプラスの気温にはなりません。また、気温が上昇すると大気中の水蒸気量も多くなるので、冬の降水である雪は多くなると考えられます。上高地を流れる梓川の融雪水量は、近年増加傾向にあり、流域内の降積雪量も増えているのです。

（鈴木 啓助／市立大町山岳博物館 名誉館長）



大町市の冬と夏の季節平均気温の変動



北アルプス爺ヶ岳周辺の高山植物と植生

爺ヶ岳は、南峰、中峰、北峰の3峰からなり、大町市内などからも3峰が並ぶ特徴的な山の形をよく見ることができます。爺ヶ岳は、周辺の鹿島槍ヶ岳、針ノ木岳に比べると、標高が低く、とがったピークなどもないため、やや目立たない山容の山かもしれません。しかし、最近の研究で、爺ヶ岳は160～170万年前の火山で、その火山活動でつくられたカルデラがほぼ90°回転隆起してできた山、というなんとにもびっくりな成り立ちをもっていることが明らかにされました。火山活動でできた山ということで、爺ヶ岳の地質には蛇紋岩や石灰岩など特異的な高山植物相をもたらす岩石がなく、また山頂標高の低さや積雪量の違いなどもあいまって、同じ後立山連峰の白馬岳などに比べると、高山植物の種多様性は低くなっています。その反面、爺ヶ岳は、後立山連峰の山地帯から高山帯にいたる植

生の垂直分布の典型をよく見ることができる特徴があります。扇沢の登山口から標高約2,500mにある森林限界(写真)までは、ブナなどの落葉広葉樹林、シラビソ、オオシラビソなどの常緑針葉高木林、ダケカンバ高木林の順に移り変わっていき、森林限界を通り過ぎると、いきなり目の前にお花畑(初夏には雪渓!)が現れます。この森林限界は、標高だけでなく山の稜線付近で風が集束して強くなり森林限界が押し下げられる“山頂現象”も加わり、ちょうど種池山荘付近から鹿島槍ヶ岳への縦走路ではっきりと見ることができます。爺ヶ岳では、森林限界より高い、高山帯の部分はハイマツに広く覆われており、その周辺や雪だまりに風衝草原やチングルマなどの咲く雪田草原などが点在しており、これら一帯がライチョウの生息環境となっています。(尾関 雅章/自然環境部)



写真 爺ヶ岳(南峰・中峰)の空中写真(2012年10月19日撮影)。写真下方の赤い屋根の建物は種池山荘。森林限界(赤線)より上部には、高山常緑針葉低木林のハイマツ林(緑色部分)が広がり、その周辺やすき間に高山風衝草原、高山荒原、広葉草原がみられる。



爺ヶ岳における GPS ロガーを装着したライチョウの行動圏と利用環境

日本におけるライチョウ研究については、それぞれの山系・山岳にどのくらいのライチョウが生息しているかということにフォーカスされてきました。私たちが調査している後立山連峰爺ヶ岳周辺ではなわばり数の増減はありますが安定しています（図1a）。富山雷鳥研究会が長年にわたり調査している立山室堂平周辺も同様の傾向を示しています。一方、静岡ライチョウ研究会と共同で調査している南アルプス南部では茶臼岳周辺ではなわばり数が安定していますが、世界最南端の生息地イザルガ岳ではここ数年なわばりが確認されなくなっています（図1b）。このような調査は、絶滅危惧種であるライチョウの生息状況を把握する上で、欠かせないことだと思います。

ライチョウは高山生態系のシンボルです。登山道を歩いていて、ライチョウに出会うことができると、とても嬉しい気持ちになります。皆さんもそうかなと思います。ライチョウは神出鬼没です。出会う時には本当に近くで足元に来ることもあります（写真1）。そうかと思えば、一日歩いても全く出会えないこともあります。皆さんもそんな印象を持っているのではないのでしょうか。全く出会えない時、彼らはどこで何をしているのでしょうか。ハイマツの中に身を潜めているのでしょうか。それとも、私たちから見えない登山道から離れた場所でガンコウランやコケモモの実を食べているのでしょうか。見ている時の情報から彼らが利用している環境を調べると、明らかに偏りが生じることは皆さんもお分かりかと思いますが、私たちからライチョウが見えている、見えていないに関わらず、定期的に彼らがどこにいるかを把握することが重要です。

技術の進歩には目覚ましいものがあります。空中生活に著しく適応したハリオアマツバメ（47～169g）やコチドリ（40g弱）にGPSロガー（正確な位置情報を記録する装置）を装着し、渡りルートや越冬地、生息環境の解明が行われています。こんな小さな鳥たちにつけて影響はないのかと心配されるかもしれませんが、適切な重さのGPSロガー（体重の3%程度）をちゃんと装着すれば、私たちは素晴らしい情報を得ることができます。ライチョウについては、海外でさまざまな研究が行われていますが、日本ではこれまでそのような研究はありません。そのため、2021年からライチョウにGPSロガーを装着し試行錯誤を重ねてきました（写真2）。その結果、ある程度の成果を得ることができました。

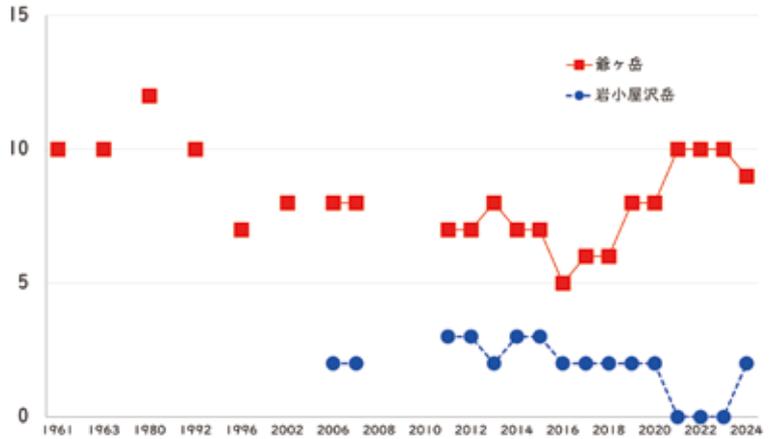


図1a 後立山連峰爺ヶ岳・岩小屋沢岳におけるライチョウのなわばり数の経年変化

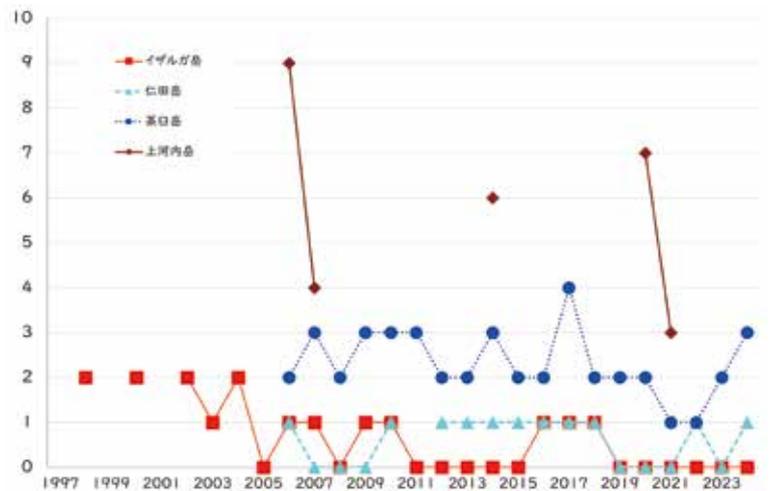


図1b 南アルプス南部イザルガ岳から上河内岳におけるライチョウのなわばり数の経年変化



写真1 ヒメクロマメノキの葉を食するライチョウ成鳥雌 (2013年7月11日 爺ヶ岳)



写真2 ネックレスタイプのGPS ロガーをつけているライチョウ成鳥雄
(2022年10月12日 爺ヶ岳)



図2a 爺ヶ岳南峰西尾根南側になわばりを所有していた成鳥雄の活動点（緑色）（2022年7月1日～8日まで
4～19時まで1時間毎に取得、ただし衛星の捕捉状況が悪い点は除く）。赤線は登山道を示す。



特集：北アルプスのライチョウをとりまく“今”を知る

信州自然講座では、苦労話を交え、成果についてお伝えしました。

今回の調査では、早朝の4時から夜の19時まで一時間毎にライチョウがいる位置をGPSロガーに記録にしました。得られたデータを見た第一印象は、なわばり期（図2a）と同様になわばりを解消した秋期（図2b）でもあまり行動する範囲が広がっていないことです。また、彼らは尾根などの自然の境界をうまく利用

しているんだなあということです。爺ヶ岳南峰西尾根になわばりを構えた雄は登山道のある尾根から北にはほとんど足を踏み入れていません（図2a）。また、爺ヶ岳中峰西側（富山県側）を中心に行動している雄は長野県側に滅多に足を踏み入れていません。

信州自然講座では調査の概要をお話ししましたが、今後、詳細に解析し、論文等で成果をお伝えしていきたいと思えます。（堀田）



図2b 爺ヶ岳中峰富山県側に行動圏がある成鳥雄の活動点（緑色）（2021年9月8日～10月6日まで4～19時まで1時間毎に取得、ただし衛星の捕捉状況が悪い点は除く）。赤線は登山道を示す。



ライチョウの野生復帰への挑戦～市立大町山岳博物館の取り組み

市立大町山岳博物館では、絶滅の危機に瀕しているニホンライチョウの野生復帰を目指して様々な取り組みを行っています。特に、中央アルプスでのライチョウの復活事業が注目されています。

◆中央アルプスでの復活事業

中央アルプスでは、1969年を最後にライチョウが

絶滅したとされていましたが、2018年に1羽のメスが目撃されたことをきっかけに、復活事業が始まりました。環境省や日本動物園水族館協会、大学研究機関などが協力し、2020年には動物園から中央アルプスへの卵の移植や、乗鞍岳の野生ライチョウの家族の移送が行われました。その後、2021年から2022年にかけて、野生由来のライチョウを動物園で

繁殖させ、さらに中央アルプスへ放鳥する取り組みが行われました。

◆ 2024年度の取り組み

2024年度には、飼育由来のライチョウから生まれた雛を人の手で育て、中央アルプスへ放鳥することが目標とされました。山岳博物館では、2ペアのライチョウから12羽の雛が孵化し、以下の新しい取り組みが行われました。

1. 腸内細菌の定着：野生ライチョウの糞から作られた腸内細菌が入った粉末を雛に与え、高山植物を消化できるようにしました。
2. アイメリア原虫への抵抗性獲得：雛に軽度の感染をさせ、抵抗性を持たせました。
3. 身体能力向上：飼育室内に高低差を作り、厳しい高山環境に適応できるようにしました。

◆ 放鳥とその後

2024年9月、雛たちは中央アルプスへ移送され、現地の環境に慣らした後、7羽が放鳥されました。



3日齢のライチョウのヒナ

放鳥後の追跡調査では、一部の雛が確認されましたが、見つからなかった雛もいました。これからも厳しい冬を乗り越え、子孫を残すことが期待されています。

市立大町山岳博物館では、来年度もライチョウの野生復帰に向けた取り組みを行う予定です。

(岡本 真緒 / 市立大町山岳博物館)

中央アルプスライチョウ復活作戦 ～復活作戦の試行錯誤～

2020年

① 飛来メスの無精卵と飼育個体の有精卵を取り替える

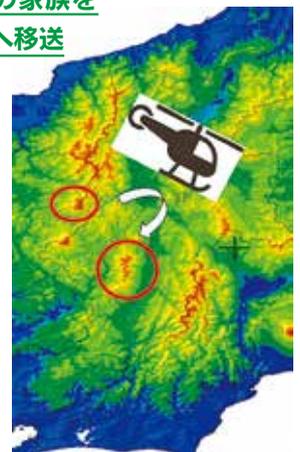
※メスはオスがなくても毎年卵を産み、卵を温める



【結果】 雛は孵化したものの、**全羽が死亡**
 巣の周辺のセンサーカメラにサルが映っていた
 →メスが驚いて逃げ、取り残された雛は低体温となり死亡した可能性

② 乗鞍岳の野生ライチョウの家族をヘリコプターで中央アルプスへ移送

【結果】 3家族 19羽を中央アルプスに放鳥
 1ヶ月後の調査ではほとんどの個体の**生存が確認!**



2021年

中央アルプスのライチョウの家族(11羽)を動物園へ移送

- 野生ライチョウは**高山植物を消化するための腸内細菌**がお腹にいる。
 一方、飼育ライチョウはこの腸内細菌を持っていない。
- 野生で生活してきた母鳥から生き方を学ばせる



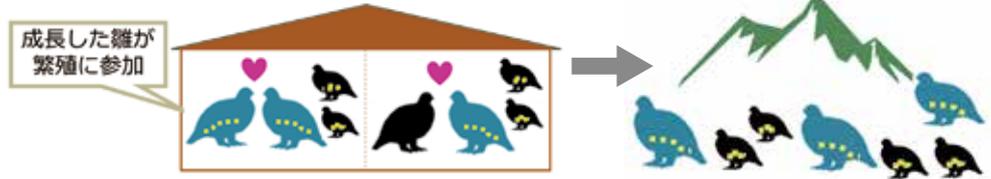


中央アルプスライチョウ復活作戦 ～復活作戦の試行錯誤～

2022年

動物園に移送した家族&その雛 計 22 羽を中央アルプスへ放鳥

動物園で繁殖させた
ライチョウの野生復帰を
初めて成功させた



長野県におけるライチョウ保護の取り組み

◆北アルプス南部での生息状況調査

今年度、クラウドファンディングによる寄付金により、北アルプス南部の常念岳周辺でライチョウの生息状況を調査しました。

生息数調査：6月から9月にかけて、ナワバリ数やヒナの生存状況を確認。推定生息数は188羽（暫定値）となりました。過去の調査結果と比較すると、生息数の変動が見られますが、引き続き定期的な観測が必要です。

中型哺乳類の痕跡調査：114例の痕跡を確認。場所は燕岳、大天井岳、西岳、常念岳で多く、時期は6月に64例、7月と8月合わせて50例と偏っていました。現在、フンの内容物を分析中で、どのくらいライチョウが捕食されているのか等の情報が分かる可能性があります。

◆中央アルプスでの取り組み

中央アルプスでは、サルの追い払いを実施しました。サルはライチョウの子育てや高山植物に影響を与えることが懸念されており、追い払いによりサルの出現は減少傾向にあります。平成30年に約50年ぶりにライチョウ1羽が発見された中央アルプスでは、環境省の保護対策や関係者の尽力により、ライチョウは令和6年9月時点で約120羽まで回復しました。

ライチョウ保護スクラムプロジェクト

これまでも多くの方々からの寄付により、高度技術者（ライチョウサポーターズエース）育成や情報アプリ「ライボス」開発、動画公開、清掃登山などの普及啓発活動も行ってきました。今後も県民や関係者だけでなく、全国の皆様と協力して保護対策に取り組んでいきます。

（坂口 龍之介／長野県環境部自然保護課）



常念岳周辺での調査風景



常念岳で確認されたライチョウの親子（令和6年8月）

こんなことやってるよ



木曽馬文化と草原の再生チーム

～全国から募集したボランティアとともに草地の再生と生きもの調査をしています～

木曽町開田高原は木曽馬で有名ですが、かつてはその餌を採るための草地がいたるところに広がっていました。現在ではその多くが森林となってしまいましたが、今も残る半自然草地の一部では隔年での春の火入れと秋の草刈りによる伝統的な管理が続けられています。そこでは秋の七草のキキョウやオミナエシなど、今では珍しくなった花や昆虫が多くみられます。こうした草地を復活させるとともに、干し草を作るために刈草を積み上げた「ニゴ」など、木曽馬や草地にまつわる豊かな伝統的知識や文化を再生し、特色ある地域づくりにつなげていきたいと考えています。

木曽馬文化と草原の再生チームは認定 NPO 法人アースウォッチ・ジャパンの支援を受けながら、環境保全研究所などの研究者や団体などが緩くつながったチームです。2022 年からアースウォッチが募集したボランティアを受け入れ、2024 年までに計 5 回の調査を実施しました。2022 年と 2023 年の調査では、管理を復活させた再生草地で開花植物を調べました。再生前のデータと比較したところ、種類も数も大きく増えていることがわかりました。しかし、この調査は草に埋もれながらの大変な調査で、しかも花の見分けには植物の専門家の指導が必須でした。そこで、2024 年の調査では新たな指標種とすべくコヒョウモンモドキ（種の保存法で保護対象のチョウ）とその食草クガイソウに絞って調査し、比較的容易に判別できることがわかりました。また、秋に訪れた別のグループでは、草を刈って干草を作る作業をしました。体力的にとってもきつかったですが、自分



自分たちで刈った草を美味しくそうに食べてくれる木曽馬

たちで刈った草を馬が喜んで食べる姿を見たことで、単なる草刈りとは違う特別な体験になりました。ボランティアからは、草刈りが持続可能な暮らしの一場面である、自然環境は人と生き物の営みが複雑に絡み単純な自然保護では解決できないと感じたなどの感想をいただきました。

かつてのように草を使わなくなった現在では、草地管理は地域にとって大きな負担です。ボランティアの力は僅かですが、これをきっかけに野の花の咲く風景と木曽馬文化の価値が再評価され、地域の活性化や関係人口の増加につなげたいと考えています。この活動が地域の伝統文化と生物多様性との生きたつながり「生物文化多様性」を再生するためのモデルケースとなることを目指しています。

(畑中 健一郎・須賀 丈／自然環境部)



急斜面で草に埋もれながら一列に並んで花の調査



重労働の成果(?)をバックに記念写真

Report

山と自然のサイエンスカフェ@信州(令和6年度)

第3回「人の暮らしと生きものたち」

話題提供者：^{こばやし よしこ}小林 慶子（自然環境部）

日時：2024年10月25日(金) 17:30～19:00

会場：くらしふと信州 ◆ 参加者：14名

人口減少時代に突入し、里山から人の暮らしが消失しつつある今、人の暮らしによって生み出された里山の自然の成り立ちと、里山から人の暮らしが消えた時の自然の変化に関する研究を紹介しながら、里山の自然と、里山を育む「里山暮らし」の価値を考えました。

講座の前に、里山利用の経験や里山の自然に対する意識や関心についてアンケートを行い、各人の意識や関心の程度を把握しました。

講座では、農林業を中心とする伝統的な人の暮らしによって生み出された里山の自然の成り立ちと、里山から人の暮らしが消えたとき、人の暮らしによって育まれてきた里山の自然はどう変わるのかを紹介し、参加者全員で、里山の恵みを次世代に引き継ぐためにできることを考えました。講座の終盤では、講座前と同じアンケートを行い、



写真 参加者全員で作成したまとめボードで関心を持った内容と意識の変化を振り返る



写真 会場の様子

講座を通して自身の意識や関心の程度が変化したかを確認した上で、参加者全員で、関心を持った内容や意識が変化した内容にシールを貼るまとめボードを作成しながら、里山の自然と、それを育む「里山暮らし」への関心を喚起するためにどのような内容が有用かを考えました。

まとめボードによって、今回の参加者は、人が自然から得ることのできる便益「生態系サービス」の説明に関心を寄せ、講座の前後で生態系サービスやそれを育む「里山暮らし」が失われることのリスクや、保全活動への共感する思いが変化したことを確認しました。何をどう伝えると効果的か、里山の保全活動などに関心のある参加者のみなさまとの意見交換もできた回でした。



令和7年度のイベント予定

詳細は、開催1ヶ月前までにホームページ等でお知らせします。
最新情報を当所のホームページでご確認ください。
(<https://www.pref.nagano.lg.jp/kanken>)



ホームページはこちらから↑

◎自然ふれあい講座

みんなで温暖化ウオッチ ～セミの抜け殻をさがせ！

毎年同じ時期に同じ場所でセミのぬけがらの種類や数を調べることで自然の変化を観察します。平成24年(2012年)度から継続中で、令和7年(2025年)度は次の6会場で開催します。

▶時期

8月1日(金)～8月8日(金)(午前中)
会場ごとに開催日は異なります。

▶場所

- ・川中島古戦場史跡公園(長野市)
- ・アルプス公園(松本市)
- ・かざこし子どもの森公園(飯田市)
- ・大町山岳博物館(大町市)
- ・市民の森公園(上田市)
- ・鳩吹公園(伊那市)



★この他にも、「サイエンスカフェ」「施設公開・親子環境講座」等の開催を計画しています。詳細はホームページで！

長野県の生物多様性に関する情報サイトのご紹介！ 生物多様性ポータルサイト「信州いきものがたり」



信州の美しい自然や生き物への興味・関心を高めていただき保全活動や配慮行動を促すことを目的としたポータルサイト「信州いきものがたり」。

生物多様性とは何か、信州の生物多様性の特色やホットスポット、また信州の生物多様性の危機について学び、生物多様性の意義や保全することの理解を深める「学習コンテンツ」や、生き物クイズやバーチャル体験で楽しみながら生物多様性への理解や興味を高める「子供向け体験型コンテンツ」、また、生物多様性に関するイベント情報など内容は盛りだくさん。



みんなで作る「参加型ポータルサイト」

皆さんと情報を共有することで、信州の生物多様性保全の理解を深めていくことが本サイトの重要なポイントの一つです。

🍃「やってみよう」のコーナーでは、自然と共生するための様々な取組を紹介しします。各自治体・団体等の生物多様性保全につながる取組情報を随時募集していますので、掲載をご希望の場合は県自然保護課へご連絡ください。



🍃「イベント」のコーナーでは、長野県内で開催されている生物多様性に関連したイベント等を紹介しします。イベント情報の掲載をご希望の場合は専用の申込フォームでお申込みください。

🍃「生き物写真館」では、SNSを活用して長野県の生き物情報を発信しします。長野県内の生き物を見つけたら、インスタグラム「#ながのいきもの」で、ぜひ投稿してください。



他にも長野県版レッドリストや希少野生動植物保護条例など、長野県の希少野生動植物の保護対策に関する情報や、県内の博物館や植物園、動物園など、長野県の生き物に触れられる施設を掲載しています。

当サイトで信州の生物多様性保全への理解を深めていただくよう、皆様のご利用をお待ちしております。

「信州いきものがたり」 <https://www.shinshu-ikimono.pref.nagano.lg.jp/>
【問合せ先】長野県環境部自然保護課



信州気候変動適応センター通信 No.6

「信州の雪は将来、どうなる？」 を開催しました

日時：2025年2月11日(火) 14時～16時

場所：会場(長野市生涯学習センター大学習室1)とオンライン(Zoom ウェビナー)

公益社団法人日本雪氷学会北信越支部主催、当適応センター共催の公開講演会「信州の雪は将来、どうなる？」が、2025年2月11日(火)14時～16時、対面(長野市生涯学習センター大学習室1)とオンライン(Zoom ウェビナー)のハイブリッド形式で開催されました。参加者は約150名でした。今年の冬は北海道や東北をはじめ日本各地で大雪となり、長野県でも北部の飯山や信濃町、白馬などでは雪がかなり積もっていることから、多くの方々に関心を持っていただけたのではないかと思います。



講演中の川瀬さん

講演会の前半では、気象キャスターで気象予報士の井田寛子さんから「近年の異常気象と気候変動～極端化する雪の降り方」について、気象研究所の川瀬宏明さんから「地球温暖化で雪はどうなる？長野の雪は増える？減る？」と題して、近年の降雪が極端化していることや、長野県の特に標高の高い場所では雪は将来増える可能性もあることなど、まさに適応を考えるうえでの貴重な情報を提供いただきました。

後半のパネルディスカッションでは、POW ジャパンの高田翔太郎さん、(株)五竜の中野比呂志さん、Stuben Magazine 編集者の尾日向梨沙さんにご登壇

いただき、そうした雪の変化に直面している立場から、雪への想いととも、気候変動への取組について紹介をいただきました。短い時間ではありましたが、参加された方にとって、この講演会が、長野県の雪の将来の変化やそれへの適応について、考えるあるいは行動していくきっかけになればと思っています。

なお、途中の休憩時間には、グリーンピースジャパン作成の諏訪湖御神渡りに関するドキュメンタリー映画「御渡り」をご覧いただきました。

(浜田 崇/自然環境部)



編集後記

●2月1日には、信州生物多様性ネットぎずなど長野県による「第10回ぎずなフォーラム『あらたな生物多様性の保全活動を目指して～10年を振り返って～』」も開催しました。●令和7年4月には、地域における生物の多様性の増進のための活動の促進等に関する法律が施行され

ます。自然共生サイト等、生物多様性を増進させる制度や取り組みにも注目です。●令和7年度も施設公開、山と自然のサイエンスカフェなどのイベントにぜひご参加ください。

(編集担当：坂爪・高野・黒江)